
紅葉の季節の物語

沖田リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉の季節の物語

【Nコード】

N4958N

【作者名】

沖田リオ

【あらすじ】

作家の担当を生業とする神崎は、自身が担当する天才高校生作家、四季紅葉に恋をする。何とか近づこうとするが、センセイにはなにか重大な【秘密】があるようで・・・。

あらすじ

総合アシスタント会社『All Vision Assist』略してASAに勤める神崎かおるは人気急上昇中の担当作家の高校生四季紅葉（P・N雪城 秋）に一目惚れした。

女の子には奥手で、なかなか近づけず、まだ【本当の恋】を知らない俺に、その存在と彼女が紡ぎだす小説で【恋心】を教えてくれた。

早速アタックを試みるも、なぜかセンセイは俺を見るたびビクビクオドオド。はじめのうちはイケメンが側にいると落ち着かないという小説のような展開だと思っていたが、よく見るとセンセイが毎回俺を見る目には怯えの色が充満していた……。

心配になり先輩に相談してみると、センセイには俺に怯える重大な【コンプレックス】があるみたいで……？

16歳のコンプレックス持ち万能作家×25歳のちょっと一途なマネージャーの年の差恋愛物語。

「センセイ、そのコンプレックス、原因ごと俺が治してあげる」

第一話

年の差って、いったい何歳まで許されるのだろうか。

テレビに目を向けていると、22歳差の年の差カップル誕生とか、20歳の美女が50歳年上の石油王と結婚したとか、愛さえあれば年の差なんて関係ないみたいなコトを言っている人がいる。

そういう人を見ていると少し自信がでてくるが、一般の人の許容範囲外であることは間違いない。せいぜい上下5歳差が限度だろう。

でも、センセイの小説にもいたな、十六歳差のカップル。

じゃあセンセイ許してくれるかな？そんな淡い期待が沸いてくるが、所詮二次元の世界でのお話。センセイは許してくれないだろう。てか俺とセンセイとの年の差っていくつだ？ 指を折って数えてみる。

ぎりぎり足りた。九歳だ。曖昧なラインとしかいいようがない。

毎日同じコトばかり考えてる。

これがいわゆる恋煩いつてやつ？

でも、これじゃいけない。

神崎かおるは気分転換するために原稿から目を離し天井を仰ぎ見た。

そのとき視界の隅に時計が写った。

やばっ、センセイが来る。

俺は急いで準備をし、打ち合わせ室へと向かった。

案の定センセイは先に来ていた。ドアを三回ノックし、中に入った。

「すみません秋センセイ、いつも遅れてきてしまっ

そう声をかけると、センセイはお約束のようにビクツと肩を震わせ、おそろおそろ俺を見た。

「いえ、あの・・・私が・・・いつも早いだけですし・・・その・・・お気になさらず・・・」

「そういうわけにもいきません。センセイを待たせるなんてマネージャーとしては言語道断です」

じゃあなんで毎回遅れるんだ？

そんな目でセンセイは俺を見た。・・・まあ、怯えの色が減っただけでもずいぶんマシな方だろう。

秋センセイ

ゆきしろあき
雪白秋センセイは本名しきもみじ四季紅葉、人気急上昇中の作家である。

彼女が作り出す作品は幅広い層に支持されている。

というのも、秋センセイは一つのジャンルにこだわらず、学生もの、恋愛もの、リーマン・OLもの・・・と数多くの作品を手掛け、その多種多様なボキャブラリーとターゲットの正確さ、キャラクターの個性豊かさが高く評価され、年齢を問わず絶大な人気と固定読者を獲得している。

「学校の方はどうですか？順調ですか？」

「あ・・・はい。特に困ったことも無く・・・」

学校という単語が出てきた。コレは仕事の話ではなく、センセイが通っている学校のことを指している。

なぜって？ センセイの正体は実は『現役女子高生』なのだ。

ちなみに全国の高校生対象の模試では毎年一位を獲得しているとか。いったいどんな頭してるんだ？もしかして頭が良いから色ん

な作品が書けるとか。

ついでにセンセイは学校に自分が作家であることを隠している。
理由はまだ知らない。

けどやっぱり・・・

「そろそろ知りたいかも・・・」

なにを？ センセイの瞳はずいぶん正直だ。

そう思ったと同時に俺は今の気持ちを口にだしてしまったことを
思い出した。

ただの独り言だと弁解してみたが、もう遅いだろう。だって思い
つきりセンセイの目見ながらいつてたし。

センセイは訝るような表情を残しつつ、かばんの中を探って何か
を取り出した。

「あの・・・今日はこの二作品とB・キングさんの方に読みきりを
一つ・・・」

まさにおそろおそろといった感じで原稿の入った封筒を机の上に
差し出した。どれどれ、題名を順に見ていった俺はその中の1つに
反応した。

「これって、【シエル・リアット】の続編ですか!？」

思わず声を張り上げてしまった。

センセイは持っていたカップを思わず落としそうになったがなん
とか堪え、ゆっくりと視線を移動させ、俺の手の中にある原稿をみ
ながらぽつぽつと答えはじめた。

「読者のみなさんから・・・要望がありまして・・・その、何年も

前に連載は終了したはずなんですけど・・・」

本当に不思議そうな目で原稿を見つめるセンセイは知らないのかな。

この作品は確かに何年も前に打ち切りとなったが、その人気の高さが人を呼び、書店は入荷直後に売り切れ。予約をしてもなかなか手に入らない。印刷が終了し、重版が未定の今は、初版や全シリーズそろったものが恐ろしい値段で取引されているという。

ちなみに俺もこの作品のファンの一人で、ある日友達に借りたらストライクゾーンと真ん中。その日からコレが忘れられず、今でもせつせと収集中。

そんな神作品を一番初めに読んでいいなんて、神様は最近良いことでもあったのかな。

でもいつまでもシエルに固執してられないので、他の封筒にも手を伸ばした。青い封筒に手をつけたとき、センセイの持っているカップがピクツと反応した気がする。

「こっちは・・・『しょこらていえゝる』の続編で。こっちの青い封筒は・・・」

「キングさん宛ての読みきりですけど・・・」

「キング・・・っていうことは、もしかして一番の得意分野のアレですか？」

「ええ、今回は新しいカップリングに挑戦してみたんです」

センセイはさっきとは打って変わって少し笑みを浮かべ、「・・・」を入れずに俺が今持っている作品について話し出した。

第二話

「キングさんで、再来月刑事特集があるんです。その特集で掲載させて戴く事になりました、思い切ってライバル同士の恋愛を書いてみたんです。でも受けの方が一方的に攻めをライバル視してて、逆に攻めは受けのことが気になって気になって仕方がないっていうお話です。攻め目線で書いてみました。個人的には受けが無茶してホシのアジトに乗り込んで、怪我して捕まっちゃうっていう展開が気に入っています」

時々身振り手振りをしながらこの話について説明してくれた。そこまで一気に話すとぴたっと動きを止めた。

「す．．．．．すいません。えと、また、勝手に一人でべらべらと．．．」

「いえいえ、自分の仕事について熱く語れるっていいことだとも思います」

率直な意見をセンセイに言ってみた。するとセンセイはさらに小さくなって。

「でも．．．普通のラノベだとまだ分かるんですけど．．．血みどろの任侠まがいなのは．．．その．．．．．好みが分かりますし」

肝心なところが一番小さかったが、慣れてる俺は簡単に聞き取れた。

成程、そういうことか。俺も確かに最初は任侠ってジャンルに驚いたけど、センセイのためなら！ となんとか耐性をつけた。

だから俺は大丈夫ですよ、と諭してみるが。「私のせいで神崎さんに大変なことを・・・」と逆におろおろされてしまった。

あれ、逆効果だったか。焦って弁解を試みる。

「なにも大変なことはありませんでしたよ？　なにが大変だと思われるたのですか？」

「全部」

即答で全否定された。

・・・・・・これも聞かなきゃよかったよ。

なんとかセンセイに好かれよう好かれようと思って口を開くが、全て空回り。

今まで人に好かれようと、ましてや異性に好意を持ってもらおうと思って話した経験が無いため、余計なことばかりが口をつく。

好感度が1%も上昇しないまま、今日の打ち合わせは終了してしまった。

「はあ~~~~~~~~」

センセイから受け取った原稿三種類がはいった黒いブリーフケースを隣の椅子に置き、コーヒーパー手にかおるは2Fラウンジの中でため息をつく。

2Fのラウンジは各階にあるラウンジよりも小さく、中も自販機とテーブルが一つ、あと椅子が向かい合わせに四脚あるだけの簡素なつくりだ。いっそ休憩所と呼んだ方があっているかもしれない。

更に階の奥にあり、近くにエレベーターも階段もないというアクセスの悪さから、昼休みになっても人が来ない。2Fにあるもう一つの大きなラウンジに人が流れているせいもあるだろう。

そんなこんなで、ココは会社で一人になりたいときにはうつてつ
けの場所だ。

（一言・・・多いんだよなあ、俺）

ブリーフケースとコーヒーを交互に見ながら反省する。

背もたれに思いつきりもたれて天井を仰ぎ見てみると、扉の方か
ら物音が聞こえた。

「あれ、かおるどうしたの？ いつになく辛気臭くなって」

「桜先輩」

入ってきたのは同じく作家のアシストをしている椿 桜先輩。俺
の教育係でもある。茶色の髪を上でお団子にしている活発な美人だ。
桜先輩には研修期間の二年とてもお世話になった。明朗な性格で
とても人当たりがいい。

「さっきまで秋先生・・・おっと、紅葉ちゃんと打ち合わせしてた
んだよね？ さては何かやらかしたな新人」

「・・・おっしゃるとおりです」

自販機からカフェオレを買い、俺の正面の席に座ったのを見計ら
ってさっきの打ち合わせの内容を包み隠さず話した。

「ふんふん。それで紅葉ちゃんに嫌な思いさせてないかって気にな
ってるんだ？」

「はい。あ、と思って弁解しようとすると思いに白々しく聞こえてし
まって。やつちゃったと思っても取り返しがつかなくて・・・」

「そうなんだ。まさか紅葉ちゃんに色々ゴリ押ししたんじゃないよ

ね？ 口調は穏やかでも態度はでかいとか」

ちろり、と睨まれ、あわてて首を振る。

「してません。センセイを怖がらせないように色々頑張ってるので」
「なら、特に紅葉ちゃん何とも思っていないよ。かおるがどんな人か
つてあたし何回も教えたし、男嫌いなのもきちん理解しててかお
ると一緒に仕事してるんでしょ」

男嫌い。

そう、センセイは男嫌いなのだ。

だから俺がセンセイの担当になったとき、暫く桜先輩が同席して
くれた。

今はなんとか慣れてくれた。

「だから感謝しないとだよかおる。高校生に気、使わせてるんだか
らね」

「はい。今はなんとか目もあわせてくれるようになりましたし」

「なら進歩だよ。大進歩だよ。紅葉ちゃんが契約して初めてASA
に挨拶に来たときなんか、まだ会社の人とか紅葉ちゃんが男嫌いだ
って知らないでしょ？ だから作家部の部長とか課長とかと会議室
に行ったとき、入って数秒で同伴してきたお兄さんの後ろに隠れて
大号泣してたんだよ」

「うそ・・・」

あのいつも大人しそうなセンセイが大号泣するなんて、考えられ
ない。

「ほんとほんと。その後お兄さんが部長たちに説明して、男嫌い発
覚」

「そうなんですか・・・」

新事実発覚。桜先輩はセンセイと仲がいいのでたまにこういう話が聞ける。

最初はお兄さんと一緒に来ていたんだ・・・。ん？

「センセイ、お兄さんいたんですか？」

「いるよ？ あれ、知らない？ 結構あの兄妹有名だよ」

「えっ、誰ですか？ 俺も知ってる人ですか？」

「知ってるも何も。A S Aの会社要項椿バージョン。思い返してみなよ」

「ええと・・・」

会社要項椿バージョンとは、桜先輩が俺を教育中に教えてくれたA S Aの要点をまとめたものだ。

総合アシスタント会社『All Vision Assist』について

その名の通り、色々な夢を応援するためにマネージャーになったり先生になったりするプロのアシスタントが揃う会社。

会社を興したいのだったら【起業部】 会社の経営の手伝いをし
てほしいのなら【秘書部】 など様々なニーズに応じた人材が揃う。

総合アシスタントなので、一般教養はもちろん、その分野での教授以上の知識を持つ。

かおるの場合は、【作家部】であまり顔を出したくない紅葉ちゃんのために、代わりに紅葉の担当さんと会ったり、出版社との仲介をしたり、会議に同席したりすること。

「……ですか？」

何回も読み返した要項を暗唱すると、先輩は「のんのん」と首を振る。

「それもだけど、憶えて欲しい役員リスト。まさか憶えてない？」

「……すいません」

「そっか、そこに載ってるよ。家帰ったらもう一回読み返してね」

先輩はガタツと音を立てて立ち上がり、空になった紙コップをゴミ箱に投げ捨てた。

俺も残っていたコーヒーをぐいっと飲み干し、同じようにゴミ箱めがけて投げ捨てた。

ブリーフケースを持って立ち上がり、もうひとつコーヒーを買い、ラウンジから出かった先輩が振り返り。

「お兄さんとはかおる、仲良くしてた方がいいよ。だって狙ってるんでしょ？ 紅葉ちゃんのこと」

にやりと笑いながら「じゃあねん。原稿あとで読ませてね」と実を楽しそうに手を振りながら去っていく。

その言葉に含んでいたコーヒーを思いっきり吹き出し、あやうくブリーフケースに掛かりかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4958n/>

紅葉の季節の物語

2010年10月9日07時38分発行